

The Kamenori Community かめのりコミュニティ

公益財団法人 かめのり財団は、日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて、
未来にわたって各国との友好関係と相互理解を促進するとともに、
その架け橋となるグローバル・リーダーの育成を目的に事業を行っています。

 公益財団法人
かめのり財団
Kamenori The Kamenori Foundation

2018年7月 No.28

日本高校生短期訪中事業



今号の内容

- ◇ 大学院留学アジア奨学生
- ◇ 日本高校生短期訪中事業
- ◇ 第12回かめのり賞 募集案内
- ◇ 講演会

大学院留学アジア奨学生

平成30(2018)年度採用の奨学生が決定し、4月7日(土)アルカディア市ヶ谷にて新奨学生の奨学生証書授与式が行われました。財団役員、選考委員の他、現役とOBOGの奨学生が多数出席し、久しぶりの再会や新たに加わった3名の奨学生との出会いをよこぎりました。懇談会では各自の研究内容をはじめ、現役奨学生やOBOGの近況や、今後の進路についてのアドバイスにいたるまで、様々な話題で新奨学生の門出を祝福する会は終始盛況なものとなりました。



大学院留学アジア奨学生

新奨学生の紹介



Nguyen Thi Thu Thao
(グエン ティ ヲウ タオ)
ベトナム
早稲田大学 アジア太平洋研究科
国際関係学 国際関係学専攻 (博士後期)

私は国際関係学を専攻しており、知的財産権と貿易の関係について研究しております。知的財産権は、一定の期間その所有者が自分の作品を使用するため、当該所有者に付与された排他的権利です。知的財産権の侵害は、保護された対象を不正に使用する行為です。侵害行為は所有者への否定的な効果をもたらすだけでなく、消費者の利益にも影響を与え、同様に経済活動にマイナスの効果をもたらします。知

的財産権に関する懸念が根強い理由は、ドーハのWTO閣僚会議で出された宣言以来、政府が知的所有権の貿易関連の側面に関する協定 (TRIPS) の条項を適用する必要性を明確にしたからです。博士課程での研究では知的財産権の保護が各国の貿易量に与える効果を検証したいと考えております。

この度は、かめのり財団の奨学生として採用していただき、誠にありがとうございます。私の研究を通じて、参考資料を提供することで、知的財産権はもはや対外貿易の障害にならず、国際貿易と同様に国間技術移転を促進するツールとして使用されることを期待しております。将来はこの夢を実現できるよう、また、皆様方のご期待を裏切ることのないよう、研究に励みたいと思っております。



Nguyen Phuong Bao Chau
(グエン フォン バオ チャウ)
ベトナム
一橋大学 経営管理研究科 マーケティング専攻 (博士前期)

私の研究テーマは「国際展開をするホテルサービスにおける原産国効果」です。原産国効果は、製品やサービスがどこで生産されたかによって、その製品・サービスに対する消費者の期待や評価が異なってくる現象を意味します。これまでの原産国効果の研究は、主に製品を対象に行われてきたことが問題であると度々指摘されており、私はサービス分野、中でも成長が早い産業の1つである観光産業における原産国効果について考察を行いたいと思っております。具体的には、ホテルブランドの発祥国により、ホテル利用者のサービスに対する期待と評価に変動がある

かについて調査します。この研究は、不足しているサービス対象の原産国効果研究、および対象とするホテルサービスの国際展開に直接貢献します。また、修士課程後も研究内容を広げ、経済のグローバル化における異文化の影響を長期的な研究目標としたいと思っております。

「異文化」というキーワードに私が関心を持つ大きな理由は、幼稚園、小学校、そして大学の合計10年間以上日本で生活してきた経験にあると思います。言い換えれば、今までの人生の半分を日本、半分をベトナムで過ごしてきたこととなります。かめのり財団の奨学生として、研究生活を精一杯努力することはもちろんですが、このような経験を踏まえ、日本とベトナムの文化交流に貢献することをもう1つの目標にしたいと思っております。

最後になりますが、この度は、かめのり財団の奨学生として採用していただき、誠にありがとうございます。



Kuy Siemkiang
(クイ シェンキアン)
カンボジア
大阪大学 言語文化研究科
日本語・日本文学専攻 言語文化研究科 (博士後期)

「平成30年度(2018)かめのり大学院留学アジア奨学生」として採用していただき心から感謝しております。

日本人は優しい、日本人が好きと思うカンボジア人は多いと思います。カンボジア人の日本語学習者はまだ少ない(約4000人、2015年度国際交流基金の日本語教育機関調査)です。私はカンボジアでの日本語教育の質の向上、規模の拡大をめざし、日本語教員になるために、日本に研究をしにきました。自分の日本人とのコミュニケーションから発生した違和感やトラブルから、日本語の「相づち」をはじめ、日本人の会話

の仕方に興味を持ちました。また、日本語とクメール語の会話の仕方には何か違いがあるかという疑問から、日本語とクメール語の会話(勧誘)の対照研究を始めました。自分の研究が日本語教育分野に少しでも役に立てばと思って頑張っています。

日本に住んでいても、大学などで日本人だけでなく、様々な国の留学生と出会う機会もあり、とてもいい機会だと思います。これからの3年間を大切に、色々な人と付き合ったり、みんなから学んだりしながら、研究を頑張っていきたいと思っております。そして、日本で学んだことや感じたこと、特に日本の文化などを多くのカンボジア人に伝え、もっと日本のことを知ってもらい、日本とカンボジアの良好関係を深めていきたいと思っております。

奨学生証書授与式

2018年4月7日(土)アルカディア市ヶ谷にて奨学生証書授与式と懇談会が開催されました。式の開始10分前から続々と集まる現役、OBOGの奨学生たちが久しぶりの再会に声を弾ませる中、すこし緊張した面持ちで来場し、静かに式の開始を待つ初々しい新奨学生たちの姿がありました。しかし、授与式の前に参加者全員で行った記念撮影では、現役OBOGの奨学生に囲まれ、役員や選考委員と並びと新奨学生たちの表情に笑みがうかび、「かめのりファミリー」に仲間入りした実感が徐々にわいていくようでした。

授与式は、常務理事 西川雅雄の新奨学生への歓迎挨拶で始まりました。その挨拶のなかで、かめのり財団の奨学生選抜の基準には学業はもちろんのこと人柄が重視されること、また、奨学生の皆が財団理念であるアジアの若い人々が日本やアジアをよく知り、お互いの違いを理解

し、絆を育んでいくことの大切さを受け継ぎ、これからの前途多難な歩みも奨学生同士相談しあって乗り越えてほしいという激励とともに、財団として奨学生たちの成長を見守り期待する姿勢があらためて示されました。続いて事務局 西田浩子から新奨学生へのオリエンテーションがあり、かめのり財団について、奨学生の心構え、今後の活動についての説明が行われました。

新奨学生の自己紹介では、各自の研究テーマや将来の目標に加え、日本で学ぶ意義や奨学生としてのこれからの抱負が語られました。壇上の新奨学生の姿に温かいまなざしを向ける現役奨学生やOBOGの多くが初心にかえったようで、懇談会で心に去来した思いを語る者がたくさんいました。

OBOG代表挨拶は、2007年度採用で第1期生の姜性湖(カンソンホ)が行いました。現在

授与式



は建築事務所に勤務する姜もかつて自分自身が奨学生となった頃のことを振り返り、かつての研究意欲に湧いた学生時代を懐かしむとともに、研究生活での困難や苦悩に直面した時はひとりで悩まずかめのりファミリーに相談することを新奨学生へ助言しました。

このあと、かめのり財団の大学院留学アジア奨学生証書が手渡され、たくさんの拍手で3名の門出を祝福しました。

懇談会は、評議員 野村彰男の挨拶で開会しました。新メンバーを囲みそれぞれの円卓で話に花を咲かせます。久しぶりに会う仲間と真剣に話し込むものもいて、奨学生同士の絆の強さを感じました。会食が落ち着いたあたりで出席した14名の現役OBOGの奨学生たちが自己紹介と近況報告を行うと、笑いあり涙あり、仲間たちが互いの近況に熱心に耳を傾ける様子が印象的でした。懇談会の恒例である新奨学生の席替えを行うころには、新奨学生の3人も参加者たちと親睦を深めあい、活発に意見交換をする様子が見られました。最後に、選考委員の五味政信氏、横田淳子氏、小林啓子氏による温かい激励の言葉で閉会しました。



(左上) 新奨学生代表スピーチ (左下) OBの挨拶 (右) 懇談会風景

第12回かめのり賞 募集案内

かめのり賞は、日本とアジア・オセアニアの若い世代を中心とした相互理解・相互交流の促進や人材育成に草の根で貢献し、今後の活動が期待される個人または団体を顕彰します。

応募区分は「かめのり大賞<草の根部門><人材育成部門>」「かめのりさきがけ賞」の3つです。多くの方からのご応募をお待ちしております。

応募締切：2018年9月21日(金)必着

詳しい募集要項や応募用紙は、ホームページよりダウンロードできます。

第12回かめのり賞募集要項

<http://www.kamenori.jp/kamenorishou.html>

かめのり賞 で 検索

第11回かめのり賞表彰式の様子



日本高校生短期訪中事業

2018年3月、日本の高校生を対象に(独)国際交流基金 日中交流センターとの共催事業として「日本高校生短期訪中事業」が実施されました。

2018年3月16日(金)～23日(金)の8日間の日程で、北は北海道、南は鹿児島県の全国から集まった高校生13名・教員3名の皆様とともに、中国・陝西省西安市および北京市を訪問する事業を実施しました。参加者の多くは初めての中国訪問。西安では現地の高校(西安外国語大学附属西安外国語学校)の訪問や陝西師範大学の日本語学科の学生との交流、北京では国際交流基金北京日本文化センターの訪問などを行いました。また、古代王朝の首都・長安であった西安と現在の首都・北京それぞれで、悠久の歴史を物語る史跡(兵馬俑、大雁塔、故宮博物院など)の見学を行いました。

普段の旅行では体験できない本事業の主たる内容として、ホームステイと現地の学校訪問があります。対面式では皆さんドキドキした緊張の面持ちでしたが、一緒に出かけたり、中華料理を作ったりして、すっかり仲良くなったようです。最後の夕食の後のお別れの際には、互いに涙を流して抱き合いながら別れを惜しんでいました。1泊2日という短い時間でしたが、中国式のおもてなしと家族の温かさに深く感動した様子でした。

西安外国語学校では、外国語の授業はその言語のみを使って授業を進行する「直接法」によって行われます。授業見学では、ハイレベルな内容と多くの生徒が積極的に挙手して発言しようとする授業風景に、大いに刺激を受けた様子でした。また交流会では、生徒たちが主催する形で、日中それぞれの高校生が混在するグループでのクイズ大会を開催。教室は熱気に満ち、前日会ったばかりとは思えないくらい深い絆を育んでいる様子でした。

参加者の一人からは事業後、「様々な方との交流を通し、多くの中国の方が日本に興味を持ってきていることに気づいた。いつか日中両国民が、日中は友好的だと心から言える日が来るのもそう遠くはないように思う」との声をいただきました。日本と中国、政治の次元では難しい課題もありますが、だからと言って人々同士の関係も難しいという必然性はないように思います。キラキラとした眼差しで交流する日中双方の高校生たちの姿から、若者同士の交流に対する希望と可能性を改めて感じました。今回、このように事業を共同実施させていただいたかめりの財団様に、深く感謝を申し上げます。

報告：国際交流基金日中交流センター 金子 聖仁

西安外国語大学附属西安外国語学校にて、現地の先生方とともに



カフェにて現地高校生と歓談



お別れの夕食会



大盛り上りのクイズ大会



大雁塔・玄奘三蔵の像の前にて

参加した生徒の声

事業を通して一番印象に残っていることはホームステイ、そしてパディと一緒に学校に行ったことです。事業の3日目にパディとはじめて対面し、その日は西安の案内をしてもらいました。城壁、お土産通り、カフェなど様々なところへ連れて行ってしてもらいました。そして、その夜はホームステイをしました。自分はホストファミリーやパディと、中国語こそほとんど話せないものの、漢字、写真やハンドジェスチャーで必死にコミュニケーションをとり、日本のこと、自分の家族のこと、日本で流行っていることなど、様々なことを紹介することができました。ホストファミリーとパディには本当に温かく迎え入れてもらい、感謝しています。次の日はパディの通う学校と一緒に登校しました。学校の雰囲気はとても明るく、多くの生徒に話しかけてもらい、多くの生徒と交流することができました。このホームステイと学校に行った2日間は実際に中国で暮らしているかのような気がしました。ホームステイをして、実際に行ってみないと経験できない貴重な体験をすることができました。

東京学芸大学附属国際中等教育学校
山本 優一郎

講演会

2018年6月、カリフォルニア大学サンディエゴ校の當作靖彦教授による「グローバル時代に期待される人材とは～地域創生のために～」というタイトルの講演会が福井大学にて開催されました。

中学生 230 名が熱心に聴講



(写真 左・右ともに) 福井大学での講演風景

かめのり財団では、カリフォルニア大学サンディエゴ校の當作靖彦教授を米国より招聘し、6月26日(火)には福井大学教育学部附属義務教育学校で中学生 230 名を対象に、翌 27 日(水)には福井大学において講演会を実施しました。福井大学では学生のみならず、学長、副学長、学部長なども参加され、アメリカ在住 40 年、日本を始めアジア各国でも活躍されるグローバルリーダーの一人、當作教授の話を聞いていただきました。

當作教授は、カリフォルニア大学での最近の話題から話を始めました。医学部では、医者育てる教育法が非常に変わってきているそうです。というのも今は、手術の 80% をロボットがする、まもなく 100% になるのだから手術の練習をする必要がない。また「ナノ分子」を血管の中に入れて、それが体の中を巡りながらいろいろな情報を集めてきて、血管のこのあたりが詰まり気味になっているなんてことがわかるので、

聴診器を当てて診断をする必要がなくなる。むしろ倒れる前に治療ができるようになるのだそうです。その技術は Google がもっていて、カリフォルニアではすでに実験が始まっているばかりか、やがては 3 億の米国人にナノ分子を入れて膨大なビッグデータを取ろうとしている。だから、これからの医者集まったデータからそれを統計的に処理し分析をする、そんな数学的な力の方が重要になるというのです。つまり、世界が変わればそこで働く人たちに必要な資質も変わってくるというわけです。

21 世紀は最も象徴的に「グローバル時代」といわれていますが、それはインターネットなどの技術の発展によるもので、今後はますますテクノロジー優先社会となり、社会は急速に非常に大きく変化してゆくと、事例を挙げながら説明されました。

カリフォルニアではすでに車の無人運転が始まっているように、AI(人工知能)の発達はめざましく、2045 年には AI が人間の知能を超えるとさえいわれている。インターネットによる情報化の進展もすさまじく、人類の歴史が始まってから 2003 年までの全世界の情報量が

500 億 GB なのに、今はたった 1 分間で 500 億 GB の情報量が飛び交っている。しかも情報量の 75% は個人が発信しているの、世界中の個人同士がつながりやすい時代になっている。さらに Google やカード会社の検索履歴などのビッグデータを分析することで、誰が何にお金を使うのかなどの膨大な個人情報が集積され始めています。

以上のような技術の進化によって、2030 年には、今の職業の 80% を AI、ロボット、コンピュータがするようになる。しかし一方で、1 年に 7~8 億円も稼ぐユーチューバーが誕生したように「情報を見つけ出して分析し、それを効果的かつ効率的に使い変化を生み出す、これが 21 世紀のインテリジェンスだ」といわれているそうです。

では「21 世紀を生き抜くために必要なスキルとは何か」、これについては OECD をはじめ、各国でも研究され公表されていますが、中でももっとも重要な能力として次のように語り、講演の締めくくりとされました。21 世紀の厳しい時代を切り開くイノベーションを興すためには、優秀な人材だけを登用するよりも、「多様性」= 多様な文化、宗教、価値観等をもった人たちが協働していくことが大きなカギであり、そのためには「共感力」= 自分とは全く異なる人の考え、気持ちを理解する力が最も大切だ、ということでした。

報告：悠プランニング 山本加津子



當作 靖彦 (とうさく やすひこ)

カリフォルニア大学サンディエゴ校教授。言語学博士。グローバル政策戦略大学院外国語プログラムディレクター、学部日本語プログラムディレクター。米国ナショナルスタンダード理事会日本語代表、米国日本語教育学会元会長など、米国における日本語教育の要職を歴任。著書に「NIPPON3.0の処方箋」(講談社)など多数。

講演会

ハノイ国家大学人文社会科学大学講演会の参加者一同

ハノイ

比較という方法論から見た「日本・日本人」

幣財団の海外での初の王敏講演会を2017年10月23日(月)にハノイ国家大学人文社会科学大学で実施しました。今回の講演会は同大学のPhan Hai Linh 准教授をはじめ日本研究の先生方のご協力の下、日本研究や日本語教育を志す学生を対象に、日本への留学をきっかけに日本研究の道を歩み、中国人だからこそ見えた日本人や日本文化の特性など、自らの経験をもとに話す講演会となりました。

まず、同大学の学長 Pham Quang Minh 教授からのごあいさつにつづいて王敏の講演を行いました。中国において狐は悪いイメージや意味を持つ一方で、日本における狐のイメージは伝統文化の中では必ずしも悪いわけではなく、きつねうどんやきつねの嫁入りということがするのは興味深いことでした。狐のはなしから日本の文化、そして遣隋使・遣唐使の時代にさかのぼり、その頃から中国と日本の文化交流は行われていたこと、そして日本から中国にわたり、文官となり中国で活躍した阿倍仲麻呂が母国に帰ることができずにベトナムに漂着し、その後安南節度使として総督をつとめたことなど、日本と中国の関係のみならず、ベトナムとつながる歴史上の人物がいたことに学生たちは驚いていました。

次に、東アジアの漢字文化圏の話につながりました。中国以外で創られた漢字である国字の紹介、そして最近日本で使われた新語が中国に逆輸入されて使われている言葉についても説明がありました。そして、宮崎駿のアニメに見る



ハノイでの講演会風景

日本人の自然観にも話が及びました。

学生たちの反応は「発表の中で説明的な映像が多く使われて面白かった」「各国家間の交流の昔から現在までのことをより知ることができた」「日本での狐の意味がよくわかって面白い」「アジア諸国間の文化交流は非常に近いものがあり有意義である」など、総じて高い評価でした。

講演会に出席したほとんどの学生が大学から日本語を学び、そのきっかけは「日本文化が大好き」「アニメやマンガに興味がある」ということでした。卒業後の進路として日系企業、日本企業への就職を希望しています。同時にほとんどの学生が日本への留学を希望していることもわかりました。多くのベトナム人学生が日本・日本語の研究に励み、将来日本とベトナムをつなぐ懸け橋になってもらいたいと強く感じました。

大阪

異文化理解と交流

NPO法人シルバーアドバイザー・ネット大阪による王敏講演会を2017年11月19日(日)に大阪日本語教育センターで開催しました。日本で学ぶ中国からの留学生も参加し、漢字の歴史や漢字文化圏の話を中心に、日中が長い歴史の中で交流し、相互に影響しあっていることに聴衆の多くの方々が興味深く感じたようでした。その後のワークショップでは、講演を受けてグループごとに意見交換をしました。漢字文化を共有している2つの国が真の相互理解になぜつながらないのか、個人的に中国を好きであっても、国同士がもっと友好関係を築くことを望んでいる、という声を多く聞いた講演会でした。

今後の予定

- 7月 かめのりスクール 2018
- 8月 第11期高校生短期交流プログラム(派遣・韓国) / 第5回高校生カンボジアスタディツアー / 第10回中学生交流プログラム(派遣・インドネシア) / にほんご人フォーラム 2018
- 9月 大学院留学アジア奨学生 夏の研修交流会(鹿児島)

発行人 / 西田 浩子 編集 / 堀井 玲子 デザイン / イワブチサトシ (BUTI design) 印刷 / 佐伯印刷株式会社



日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します！

公益財団法人 **かめのり財団** The Kamenori Foundation

〒102-0083 東京都千代田区麴町5-5 ベルビュー麴町1階

TEL : 03-3234-1694 FAX : 03-3234-1603

E-mail : info@kamenori.jp URL : http://www.kamenori.jp/